近世近代における群青と洋紅

Japanese Pigment Names “*Gunjo*” (blue) and “*Yoko*” (red) and their Compositions in the Edo and Meiji Periods

島津 美子

SHIMADZU Yoshiko

はじめに
❶群青と紺青
❷洋紅
結びにかえて

［論文要旨］

江戸後期以降，欧米から輸入された合成顔料には，従来使われてきた天然顔料と色調の似た顔料があり，群青と呼ばれる二種類の青色顔料がこれにあたる。群青は，工業分野では合成ウルトラマリンブルーを意味し，日本絵画や彩色歴史資料を扱う分野では，藍銅鉱（アズライト）から作る顔料を示す。前者は 1828 年にフランスで合成方法が確立し，日本にも 19 世紀後半には輸入されていた。明治期までは「舶来群青」,「人造群青」などと呼ばれたが，工業分野で広く用いられるようになると，接頭語がなくても合成ウルトラマリンブルーを表すようになった。一方，前近代の日本では，アズライトを原料とする青色顔料に，紺青と呼ばれたものもあった。群青よりもこい青色のものを紺青と称したことから，現在の工業分野では合成顔料プルシアンブルーの和名とされている。

洋紅は，明治期の錦絵に多用されたといわれており，名前が示す通り，輸入の赤色顔料である。もともとは南米大陸原産のカイガラムシ，コチニールから作るカーマインレーキであったが，合成染料の種類が多くなるころには，必ずしもコチニールではなく，赤色の合成染料に変わっていた可能性が高い。

本研究では，これらの群青・紺青，洋紅について，名称と原材料がどのように理解されていたのかを，文献調査と実資料の分析を通して整理した。群青と紺青のように材質と名称が分野により異なっているのは，江戸後期に色調の似た合成顔料が輸入されたことが契機といわれているが，実際には，明治後期以降であったと考えられる。明治期にさまざまな外国産の顔料が輸入されたことにより，在来の顔料の名称と色調から日本語の顔料名が付けられた。一方で，分野によっては，江戸時代から使われていた顔料を名称とともに継続して使っていた。江戸時代後期から明治期の顔料については，当時の名称と材質との関係は一定ではなく，どのような文脈で使われているかを理解する必要があろう。

【キーワード】天然青色顔料，紺青，ウルトラマリンブルー，コチニール，錦絵